

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：早川 りか

| | |
|-----------|---|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 在宅看護学 | 訪問看護の事業所管理・運営 訪問看護師の臨床判断能力 対人援助職支援 在宅ターミナルケア |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士（臨床教育学） | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程修了 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|------------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 新入生に対してのグループワークおよび発表方法の指導 | 2016年4月～2018年6月 | 1年生前期の学びの基盤の授業において、グループワークでの討議の進め方や話し合ったことをまとめて原稿を作成する方法についての指導を行った。 |
| 2. 多職種連携についての演習指導 | 2015年4月～2017年6月 | 看護学科、理学療法学科、作業療法学科、臨床工学学科との合同で編成されたグループで、事例の検討をおこなった。それぞれの学科の立場から意見交換を行うことで多職種連携を体験的に学ぶことができるようにした。 |
| 3. 実践事例や体験記、一般書なども活用した全人的ケアについて的小グループ演習の活用：在宅ターミナルケアの方法 | 2014年4月～2018年8月 | 在宅における緩和ケアや看取りについて、最近の動向を踏まえながら、具体的な援助方法について解説した。この授業では全人的ケアについて、実践事例や体験記、一般書なども活用しながら学生が幅広い視野で人の死について考えを深めることができるよう配慮した。 |
| 4. 研究の大切さや楽しさを感じることができるよう看護研究の方法に関する演習の取り組み | 2014年4月～現在 | 看護研究の基本的な方法について解説をおこなうとともに、在宅看護学領域における学生個々の問題関心にあわせてテーマの設定や研究計画について学生と一緒に考えた。またデータの収集から論文完成までの一連の過程をとおして、研究の大切さや楽しさを感じることができるように配慮した。 |
| 5. 在宅看護過程の展開方法における学生主体に取り組めるため小グループ演習の活用 | 2000年4月～現在 | 在宅療養者の看護過程を展開方法について、脳梗塞後遺症の高齢者、小児、難病、精神疾患の療養者の事例について小グループによる演習形式で学生が主体的に検討できるようにした。 |
| 6. 家庭に身近にあるものを活用した在宅看護に必要な技術の活用 | 2000年4月～現在 | 在宅看護に必要な技術について、演習を中心とした授業を展開した。自宅にあるものを工夫してケアを行う方法や住宅改修の図面作成など、実際に見る、触れる、使ってみるなどの体験学習を多く盛り込むようにした。 |
| 7. 訪問看護師との同行訪問によって得た体験と学内で学んだ知識とを結びつけ統合化を図る在宅看護の実践方法についての体験学習の実施 | 2000年4月～現在 | 在宅看護学の臨地実習において、訪問看護師との同行訪問によって得た体験と学内で学んだ知識とを結びつけ統合できるように指導した。また実習に臨むにあたっての事前の学習や準備、また実習後のリフレクションが十分にできるように配慮した。 |
| 8. 在宅看護概論の教育方法に法制度や社会資源の理解のための年表を作成し活用 | 2000年4月～現在 | 少子高齢化における在宅療養推進の背景と在宅看護にかかわる法制度、社会資源および、在宅看護の対象として療養者および家族への支援の方法、訪問看護ステーションを中心に展開される在宅看護活動、訪問看護師の役割について解説した。特に本授業では在宅療養を取り巻く社会の動向や家族への支援について考えを深めることができるよう、独自に年表を作成し、楽しく学習できるように工夫した。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 在宅看護技術における排便モデルの作成 | 2000年4月～現在 | 在宅看護において、比較的頻度の高い処置である排便については、適当な教材がないため、ゴム囊やロール芯、小石、粘土などにより疑似肛門を作成し演習に使用した。これにより、排便の手技を効果的に伝えることができた。 |
| 2. 在宅看護にかかわる法制度に関する資料 | 2000年4月～現在 | 既存の教科書等では、在宅看護領域にかかわる保健医療福祉制度が項目ごとの記述・解説であることから、それらを相互に関連して捉えることが難しいため、老人福祉法、高齢者の医療の確保に関する法律、介護保険法、障害者総合支援法を中心に一覧できるように、制定年度や制定の背景とともに年表に近い形式で作成し、学生にとって学習しやすいように努めた。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 教育・学習理論を踏まえたスタッフ研修の方法についての講義 | 2017年11月9日 | 大阪府茨木市高槻市を中心とする地域の医療機関の管理職に対して、教育原論や学習理論を紹介しながら、スタッフの教育方法や研修会の企画・運営の方法についての講義・演習を行った。 |
| 2. 看護師の育成のあり方についてグループワーク等を織り交ぜながら受講者とともに考え合える人材育成の方法（人材育成論：認定看護管理者ファーストレベル講習） | 2016年9月～2018年11月 | 人材育成の基礎知識として、成人学習の考え方、体験学習、役割理論、モデリング等の基本的概念および職場教育において重要とされる概念である正統的周辺参加論について解説した。また、看護師の育成のあり方についてグループワーク等を織り交ぜながら受講者とともに考え |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|--------------------------------|---------------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 3. 地域における保健・医療・福祉の連携と協働についての講義 | 2016年3月14日 | 合えるように展開した。 病院・施設に勤務する看護職・介護職に従事するスタッフを対象として、病院から在宅看護への移行が促進されている背景や、現在の取り組みについての講義を行った。ここでは特に退院支援の具体的な進め方などを盛り込むようにした。 |
| 4 その他 | | |
| 1. 高大連携授業 | 2017年7月31日2018年8月2日 | 高大連携授業において、「看護学入門」、「在宅看護を知ろう」、「おうちでできる看護の工夫」をテーマとして高校生への講義・演習を行った。 |
| 2. 学生指導、学年担任、カリキュラム検討 | 2016年4月～2019年3月 | 教務委員として、授業カリキュラムの検討および授業運営や担任業務、学生指導全般にかかわった。 |
| 3. 実習の計画・調整 | 2014年4月～現在 | 実習要綱共通項目の作成、実習のローテーション表作成、実習施設との調整を行った。 |
| 4. 就職指導や就職に関する行事の企画・運営 | 2014年4月～現在 | 就職指導の担当委員として、学生の就職指導や相談に従事。マナー講座、履歴書面接講座、病院説明会などの就職関連の行事の企画運営を行った。 |
| 5. 国家試験対策 | 2014年4月～現在 | 国家試験対策として、在宅看護学領域の範囲について、頻出問題や既出問題の解説を中心としながら、在宅看護学全体としての復習を行うとともに、国家試験出題基準に準拠しながら、押さえておくべきポイントなどについての講義を行った。また、ゼミ生を中心とした学生に対して、個別に学習方法の指導を行うとともに過去問題集を活用した学習会を開催した。 |
| 6. 卒業論文指導 | 2014年4月～現在 | 在宅看護学ゼミとして、地域の中での療養者への理解や支援の方法、在宅における看取り、看取りについての訪問看護師の思いなどをテーマとして、文献研究や療養者や訪問看護師へのアンケート調査やインタビュー調査などを計画・実施し、論文にまとめるまでの指導を行った。 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|-----------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 大阪府介護支援専門員 | 2000年2月10日 | |
| 2. 看護師免許 | 1987年5月20日 | |
| 2 特許等 | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 4 その他 | | |
| 1. 認定看護管理者ファーストレベル講習の受講者審査 | 2018年4月～2019年3月 | 認定看護管理者教育課程教育運営委員として、講習会の企画・運営や受講予定者の提出書類および小論文による選考を行った。 |
| 2. まちの保健室ボランティア | 2016年5月 | まちの保健室に学生とともに足浴のボランティアとして参加した。 |
| 3. 社会貢献活動の計画 | 2016年4月～2017年3月 | 大学社会貢献委員として、大学全体の社会貢献の取り組みについての計画や運営にかかわった。 |
| 4. 高校へ出張授業 | 2015年～現在 | 高校へ出張し、「看護学入門」、「在宅看護を知ろう」をテーマとして授業を行った。(1年に1回～2回) |
| 5. オープンキャンパスの企画・運営 | 2014年～現在 | オープンキャンパスについて、看護学科ブースの企画や運営にかかわった。特に2015年度は入学試験委員として、この行事の全体にかかわる企画を担当した。 |
| 6. 対人援助についての研究会開催 | 2011年4月～2017年3月 | 武庫川臨床教育学会対人援助職研究部会世話人として、兵庫県西宮地区の対人援助職の研究会を年2～4回開催した。 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|-----------|-------------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. (博士論文) 訪問看護師の臨床判断のプロセスに関する研究 —訪問看護師の実践と語りから— | 単 | 2014年3月 | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 博士課程 | 訪問看護師の臨床判断のプロセスを明らかにするために、訪問看護師の実践場面の参与観察を行い、療養者へのケアやかかわりについての分析をおこなった。まず、訪問看護師が日頃の業務で抱える困難感についての類型化を試みた。その結果、①独居、②介護者の高齢化、③経済問題、④自己決定への支援、⑤暴言・セクシャルハラスメント、⑥利用者あるいは介護者の性格、価値観、⑦医療や制度への不信 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|--|-------------|---------------|--|--|
| 2 学位論文 | | | | |
| 2. (修士論文) 看護教育における実践知獲得プロセスに関する研究 | 単 | 2011年3月 | 武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科 修士課程 | 感、⑧ターミナル期、⑨住居の不潔さ、異臭、などの問題を抱えた療養者に対して看護師が介入の難しさを感じていることがわかった。その上で、一人で療養者宅へ訪問する訪問看護師の特性を踏まえ、訪問看護師に求められる臨床判断能力についての検討を行った。研究の結果、訪問看護師の臨床判断には、次の6つのことが関与していることが明らかになった。1) 訪問看護師としての役割意識、2) 医療従事者としての倫理観、3) 患者への共感、4) 所属する組織への責任感、5) 国や地域の保健医療福祉施策への役割意識、6) 自己の成長への期待、である。訪問看護師は、この6つのことを考慮しながら、判断を行っていた。 看護学生の技術の習得のプロセスを解明することを目的とし、アンケートと面接調査を実施した。その結果、学生は、最初は客観的な指標により決められた手順や方略をそのとおりに遂行することを主とするが、次第に自己の評価基準を獲得し、自らの経験や感覚を頼りに、主観的な行動へと移行していくという、ドレイファスの技能習得の五段階があてはまることが実証できた。また、「客観」から「主観」への移行が円滑に進むためには、正統的周辺参加論で述べられているように、学習者が所属する共同体の人々とのかわりや、学習者の主観性を認め、支持する人々の支えが不可欠であることが示された。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 大学生への看護基礎教育における在宅緩和ケア授業の学習効果に関する研究 | 共 | 2018年1月 | ホスピスケアと在宅ケア Vol. 25 No. 2 p.122-128 | 訪問看護師による特別講義を受講した学生に対して、授業の約1年後にアンケート調査を実施し、講義での学びがその後の授業や実習の中で活用できたかについて調査した。その結果、学生が特別講義の内容で心に残っていることとして、【患者の側にいることの大切さ】、【家族への支援】、【トータルペイン】、【訪問看護師の役割】、【疼痛緩和の方法】があった。また、実習でターミナル期の患者にかかわる機会が少ないこと等により、学生は実際の場面ではどうしたら良いかわからず、学びを十分には活用できていないということが明らかになった。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能だがデータ収集・分析の大部分を担当した：早川りか、堀智子、森谷和代 |
| 2. Nursing support to an incurable disease patient and her family with the consideration of their life stage -Based on the support provided to a spinocerebellar degeneration patient and her family during home care : 難病療養者および家族のライフステージを踏まえた支援についての一考察 -脊髄小脳変性症の療養者と家族への支援から- | 共 | 2015年8月 | Aino journal Vol.13 p.79-81 | 長期にわたる難病療養者への支援のあり方について考察することを目的として、本人と家族の成長発達、およびライフステージという視点から事例の検討を行った。検討の結果、難病療養者の長期にわたる経過の中で、療養者、家族は、さまざまなライフイベントを経験する中で、介護をおこないつつも、家族としての役割や絆を大切にしながら過ごしていること、そしてそれを支援することが訪問看護師の役割として重要であることが明らかになった。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能データの収集、分析、執筆の大部分について担当した：早川りか、中嶋久子、土谷さく代 |
| 3. 訪問看護師の臨床判断のプロセスに関する研究 -訪問看護師の実践と語りから- | 単 | 2014年8月 | 武庫川女子大学臨床教育学研究科研究誌 第20号 p.1-13 | 訪問看護師の現場での判断の様相を明らかにすることを目的として、訪問看護師の実践場面の参与観察を行い、療養者へのケアやかかわりについての分析をおこなった。その上で、一人で療養者宅へ訪問する訪問看護師の特性を踏まえ、訪問看護師に求められる臨床判断能力についての検討を行った。研究の結果、訪問看護師の臨床判断には、次の6つのことが関与していることが明らかになった。1) 訪問看護師としての役割意識、2) 医療従事者としての倫理観、3) 患者への共感、4) 所属する組織への責任感、5) 国や地域の保健医療福祉施策への役割意識、6) 自己の成長への期待、である。訪問看護師は、この6つのことを考慮しながら、判断を行っていた。 |
| 4. Study on the Judgments of Home-Visiting Nurses in Support of the Home-Care Patients with Various Issues : 多様な問題を抱える療養者支援における訪問看護師の判断に関する研究 | 単 | 2014年3月 | Aino journal Vol.12 p.29-32 | 支援の難しい事例において訪問看護師がどのようなことに困難感を感じているかを把握するために、支援の難しい3つの事例について、訪問看護師にインタビュー調査を行い、看護師がどのように状況をとらえていたかについて報告した。この調査により、在宅療養者の置かれた困難な現状、および療養者の抱える問題が病気や障害だけでなく家族問題、経済問題、社会問題など多岐にわたり、それらが複合的に関与していることから、訪問看護師が現場で葛藤を感じながら看護を行っている現状が明らかになった。 |
| 5. 地域で活動する対人援助職の困難性および専門性に関する検討 - | 単 | 2014年3月 | 臨床教育学論集 第7巻 p.30-35 | 地域で活動する保健・医療・福祉の活動にかかわる対人援助職が職場で抱える困難感や、支援困難事例 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|---|-------------|---------------|------------------------------------|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| 援助職、援助実践グループの活動 と取り組みから— | | | | への対応等で感じている難しさを明らかにすることを目的として、兵庫県西宮市で活動する「対人援助職研究会」の研究会の報告を中心にまとめた。援助職を取り巻く問題としては次の4つに分類されることが明らかになった。①対人援助職を取り巻く環境、②当事者の理解の難しさ、③対人援助職の専門性、④専門職養成の課題 |
| 6. 人間発達援助専門職の抱える困難性とケアの倫理性 —医療・看護の倫理の変遷から考えるケアの倫理— | 単 | 2013年4月 | 臨床教育学研究 第1巻 p. 105-121 | 訪問看護の実践的ケア場面における対人援助職の困難性について検討することを目的として、医療従事者のもつ倫理観および医療倫理の変遷という観点から文献検討を中心に考察を試みた。その結果、臨床場面における支援の難しい事例へのかかわりでは、援助者は、規則や規範という「正義の倫理」と、相手の状況や事情に心を動かされなにかしきたいという「ケアの倫理」との葛藤をもちながら、より適切性の高いかかわりを模索していることが明らかになった。 |
| 7. 臨地実習における看護学生の成長と看護技術の熟達について —ケアへの拒否のある患者を受け持った学生の語りと学びから見えてきたこと— | 単 | 2012年8月 | 臨床人間関係論研究vol .3 p. 1-11 | 臨地実習での学生の成長過程を明らかにすることを目的として、在宅看護学の臨地実習におけるケアに拒否的な患者とのかかわりの中で、相手に合わせたケアの方法を考える学生の成長について分析するとともに、正統的周辺参加論等の学習論を用いて看護師の成長と育成のあり方について考察した。その結果、看護学生の技術の熟達過程として手順を模倣することから次第に、周囲の状況を考慮しながら自分なりの状況の解釈に基づいて手順を応用するようになること、また、患者との関係や医療従事者の一員としての役割意識などが技術の熟達に影響をしていることが明らかとなった。 |
| 8. 看護教育と臨床教育学 —マニュアルと臨床の問題— | 単 | 2011年10月 | 臨床教育学研究 第0巻 p. 103-113 | 医療現場におけるマニュアルの在り方や意義について考察することを目的として、文献を中心に検討した。その結果、想定外の出来事に直面した場合の看護師の臨床判断は、最初はマニュアルに則り行われるが、ベテランになるにつれて自らの経験則に基づきながら、事象を客観ではなく主観的な視点からも捉えることができるようになり、想定外の出来事に直面しても、自らの経験則と倫理観にもとづき判断ができるようになることが明らかになった。 |
| 9. 教師と子どもたちとのかかわりの中で「受け取る」ことの大切さについて | 単 | 2010年10月 | 臨床人間関係論研究vol .2 p. 76-85 | 教師の言動が、学習者の学習プロセスにどのような影響を与えるのかについて明らかにすることを目的として、小学校での授業見学をもとに、学習者の学習のプロセスについて検討を行い、その中で教師のかかわりが学習者にどのような影響をもつものであるかについて考察した。その結果、教師の語りやデモンストレーションを児童が「善きもの」として受け止め、それを模倣するところから学習が展開することが明らかとなった。 |
| 10. 臨床場面における看護技術の熟達についての一考察 | 単 | 2010年10月 | 臨床人間関係論研究vol .2 p. 41-51 | 学生の技術の習得過程を明らかにするために、基礎看護学実習における、看護学生の血圧測定技術の熟達の様相について、ドレイファスの技能習得の5段階をスケールとして分析した。その結果、学生の技術習得過程もドレイファスの技能習得過程で説明しうることが実証された。 |
| 11. 大阪大学における結核集団感染の経過とその対策 | 共 | 1999年3月 | CAMPUS HEALTH 35巻1 号 p. 400-404 | 大学生の健康習慣についての現状調査を目的として、プレスローの7つの健康習慣について大学生にアンケート調査を実施し、各学年や自宅生、下宿生などの集団ごとの傾向について比較検討した。調査の結果、学年が進行するにつれて、飲酒習慣のある学生は増加し、運動習慣が減少していることが明らかになった。また、自宅生と一人暮らしの学生との比較では、朝食、睡眠、飲酒について自宅生の方がより健康に留意した生活をしていることが明らかになった。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能だが、データの収集、分析、執筆の大部分を担当した：早川りか、根来佐久子、宮島恭子、守山敏樹、安東明夫、杉田義郎 |
| 12. 大阪大学学生・院生の学年進行によるライフスタイルの変遷～特に1年生と4年生の比較 | 共 | 1999年3月 | CAMPUS HEALTH 35巻1 号 p. 250-254 | 大学生の健康習慣についての現状調査を目的として、プレスローの7つの健康習慣について大学生にアンケート調査を実施し、各学年や自宅生、下宿生などの集団ごとの傾向について比較検討した。調査の結果、学年が進行するにつれて、飲酒習慣のある学生は増加し、運動習慣が減少していることが明らかになった。また、自宅生と一人暮らしの学生との比較では、朝食、睡眠、飲酒について自宅生の方がより健康に留意した生活をしていることが明らかになった。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能だが、データの収集、分析、執筆の大部分を担当した |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-------------|--|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| | | | | 当した：早川りか、根来佐久子、宮島恭子、守山敏樹、安東明夫、杉田義郎 |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1. 日本の臨床教育学とナラティブ的研究 ー医療・看護の立場からー | 単 | 2012年9月3日 | 日本臨床教育学会第2回研究大会シンポジウム、都留市 | 医療・看護領域におけるナラティブ的研究の意義について、そもそもこの領域が丁寧かつ詳細な症例研究をもとに発展してきたという事実により、その意義と有効性について報告した。 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 訪問看護における移動中の交通事故の現状と課題（第1報） ー訪問看護事業所への調査からー | 共 | 2018年12月9日 | 日本在宅看護学会第8回学術集会、静岡市 | 訪問看護事業所のうち無作為に抽出した3000施設へ質問紙を郵送し「移動の環境」、「交通事故の発生状況」、「訪問看護事業所の管理体制」についての調査を行った。962件の回答を得、地域毎に移動の方法や抱えている問題、課題にそれぞれ特徴がみられた。また、交通事故以外に、移動時間の逼迫によるスピード違反や駐車違反などの問題がストレスになっている実態が明らかになった。早川りか、寺田准子、人見裕江、佐々木純子 |
| 2. A特別支援学校の看護師の定着と教員との協働の関係 ー看護師離職が少ない特別支援学校の事例ー | 共 | 2018年12月15日 | 日本看護科学学会第38回学術集会、伊予市 | 特別支援学校に勤務する看護師の聴き取りを行い、教師をはじめとする他職種の連携、母親とのかかわり、子どもへのケア等、実際に行っている業務やそこで感じているやりがい、達成感、困難感などについて調査を行った。その中で連携がうまくいっているA特別支援学校の例に焦点をあて、協働関係の構築について考察をおこなった。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、看護師のインタビュー結果の分析とコードの抽出を中心に研究に関わった。長谷川由香、井上寛子、早川りか、高間さとみ |
| 3. フレイル予防に取り組みよう！～あなたと私一緒に踊ろう～学生とコラボでつどいばを拠点に世代交流 | 共 | 2017年8月6日 | 日本地域看護学会第20回学術集会、別府市 | 高齢者フレイルの予防への取り組みとして、地域の高齢者のつどい場等で、歌や踊りを取り入れながら学生との交流を行うことの意義と効果について、実際の活動を紹介しながら報告した。若者との交流をとおした取り組みは嚆下状態の改善をはじめとして、身体面、精神面において効果がみられることが示唆された。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、取り組み全体をとおして補助的に関わった。人見裕江、柴田美意子、尾関唯未、早川りか他。 |
| 4. 看護基礎教育における大学生の在宅緩和ケアに関する意識調査 - 訪問看護師による実践的な授業を通しての一考察 - | 共 | 2017年6月23日 | 緩和医療学会 第22回学術集会、横浜市 | 訪問看護師による実践的な授業の1年後に学生にアンケートを実施し、在宅緩和ケアの認識及び、授業の内容が実習に活用できたかについて調査した。学生は講義を受け、在宅緩和ケアを難しいと感じながらもがん患者の退院後の生活へのイメージや患者を生活者として見る視点、家族ケアについて実践に活かすことができると認識していた。学生はがん患者の生活や家族ケアについて、本授業を通して意識が高まっていることが明らかになった。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが研究全体についての中心的役割担った。森谷和代、早川りか、堀智子。 |
| 5. 5 An Interview-based Study of Collaboration among Nurses in Special Needs Schools. 特別支援学校における看護師の他職との協働についてのインタビュー調査 | 共 | 2017年3月25日 | The 3rd International society of Caring and Practice Conference, kurume. | 特別支援学校に勤務する看護師の聴き取り調査を行い、教師をはじめとする他職種の連携、母親とのかかわり、子どもへのケア等、実際に行っている業務やそこで感じているやりがい、達成感、困難感などについて調査を行った。医療的ケアについての判断やその判断を伝える上での他職種との意思の疎通などについて、看護師が困難感を感じていることが明らかになった。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、看護師のインタビュー結果の分析とコードの抽出を中心に研究に関わった。長谷川由香、高間さとみ、早川りか |
| 6. 大学生への看護基礎教育における在宅緩和ケア授業の学習効果に関する研究 | 共 | 2017年2月5日 | 第24回日本ホスピス在宅ケア研究会全国大会、久留米市 | 在宅緩和ケアの授業において、臨床現場の訪問看護師を招聘し、事例についての語りを中心とした講義を展開することについての意義を明らかにするために、学生へのアンケート調査を実施し、その結果、講義後1年を経過した後であっても事例については学生に強く印象づいていることが明らかになった。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、データ収集・分析・発表の大部分を担当した：早川りか、堀智子、森谷和代 |
| 7. 地域で活動する対人援助職の困難性および専門性に関する検討 | 共 | 2015年2月22日 | 武庫川臨床教育学会冬季集会、西宮市 | 地域で活動する保健・医療・福祉の活動にかかわる対人援助職が職場で抱える困難感について、職場の環境および、特に非常勤職員への依存による業務調整の難しさや常勤職員の負担感などを中心に検討し |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|--|-------------|---------------|--------------------------|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 8. 在宅看護学実習における学びの構造化についての検討 | 単 | 2015年11月2日 | 第5回日本在宅看護学会学術集会、東京都 | た。その結果、①専門職と非専門職の立場の違い、②専門職の業務範囲、③地域間や多職種間での連携、④専門職の社会的・経済的評価、という4つの点を踏まえた上での業務調整や役割分担が必要であることが示唆された。 本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、共同研究につき本人担当部分抽出不可能だがデータの収集、分析、発表の大部分について担当した：早川りか、影浦紀子、中村又一、石井邦也 在宅看護学実習において、期待される学習内容と、実際の実習場面で体験が予想される内容との整合性について検討を行うことを目的として、実習目標ごとの学習内容の図式化を試みた。このことにより、実習指導の場面で系統立てた指導が可能となることが期待される。 |
| 9. 支援の難しい事例における訪問看護師の困難感に関する調査—訪問看護師の語りから— | 単 | 2015年10月3日 | 第46回日本看護学会学術集会：在宅看護、名古屋市 | 訪問看護における支援困難事例への支援について、看護師へのインタビュー調査の結果をもとに、看護師の抱える困難感についての類型化を試みた。その結果、①独居、②介護者の高齢化、③経済問題、④自己決定への支援、⑤暴言・セクシャルハラスメント、⑥利用者あるいは介護者の性格、価値観、⑦医療や制度への不信感、⑧ターミナル期、⑨住居の不潔さ、異臭、などの問題を抱えた療養者に対して看護師が介入の難しさを感じていることが示唆された |
| 10. 地域におけるケアの現状と課題—訪問看護の立場から見えてくる地域の療養者の現状と課題— | 単 | 2013年9月29日 | 日本臨床教育学会 第3回研究大会、西宮市 | 訪問看護における支援困難事例について、訪問看護ステーションにおけるフィールド調査にもとづき、貧困問題を抱えた療養者、家族問題を抱えた療養者、居宅がゴミ屋敷となっている療養者の3つの事例紹介をもとに、訪問看護での支援の方法や、他職種との連携について報告した。これらの事例より、訪問看護と地域の福祉システムとの連携が重要であることが示唆された。 |
| 11. 長期にわたる難病療養者および家族への支援に関する研究（第二報）—難病療養者の医療機器導入をめぐる心理面での支援— | 共 | 2013年11月16日 | 第44回日本看護学会学術集会：地域看護、金沢市 | 難病療養者について、病状の進行にあわせた、介入方法及び医療機器の導入について、主として家族の心理的支援に焦点をあて考察した。この研究により、病状の進行に合わせた社会資源や福祉用具の導入、医療機器の導入については、十分なインフォームドコンセントと本人・家族の心理的動揺に配慮したかかわりが需要であることが明らかになった。 本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、共同研究につき本人担当部分抽出不可能だが、家族の語りのまとめを主として担当した：中嶋久子、早川りか、土谷きく代 |
| 12. 長期にわたる難病療養者および家族への支援に関する研究（第一報）—脊髄小脳変性症の療養者と家族のライフステージに合わせた支援について— | 共 | 2013年11月16日 | 第44回日本看護学会学術集会：地域看護、金沢市 | 60歳代で発症した神経難病療養者および家族と約10年にわたる訪問看護師とのかかわりを、ライフステージという視点から考察し、それぞれの段階にあわせた支援と計画調整のあり方について報告した。この研究より療養者本人の生活だけでなく、家族の就職、結婚、子育て、進学などそれぞれのライフステージを踏まえたかかわりが看護師には求められることが示唆された。 |
| 13. 看護学生の臨地実習における血圧測定技術の熟達過程に関する研究 | 単 | 2012年9月5日 | 第43回日本看護学会学術集会、盛岡市 | 本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、共同研究につき本人担当部分抽出不可能だが、家族史の年表作成と分析を主として担当した：早川りか、中嶋久子、土谷きく代 基礎看護学実習において、看護学生が回を重ねるごとに受け持ち患者の血圧測定技術が上達していく様相について、学生への聴き取り調査をもとに検討し、学生の教育・育成方法のあり方について考察した。聴き取りの結果、学生の血圧測定の熟達には、ドレィファスの技能習得の5段階に沿って、最初はマニュアル依存の状態から次第に自分の感覚や経験を頼りに自分なりの方法で実施できるようになることが示唆された。 |
| 14. 訪問看護の立場から見えてくる地域の療養者の現状と課題 | 単 | 2012年7月30日 | 武庫川臨床教育学会第7回研究大会、西宮市 | 訪問看護における支援困難事例について、筆者が訪問看護師としてかかわった、独居で暴力のある認知症高齢者とかかわりおよび多系統委縮症の療養者の意思決定への支援についての事例をもとに、訪問看護師が不安感や困難感を感じている現状があることについて報告した。 |
| 3. 総説 | | | | |
| 1. (書評) 人と人とかかわりの中に生きるということ～ミルトン・メイヤロフ著 (田村真・向野宣之訳) 「ケアの本質—生きることの意味—」～ | 単 | 2018年3月31日 | 臨床教育学研究vol.6 p.113-116 | 「ケア」という言葉は、世話、介護、保護という意味の他にも、管理、注意、心配、気苦労、気がかり、不安などの意味ももっている。原著は「On Caring」であるが邦訳版では、「ケアの本質—生きることの意味—」となっており、ケアとは人と人とか |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|-----------------------------------|-------------|---------------|---|--|
| 3. 総説 | | | | |
| 2. 循環器健診結果報告 | 共 | 1996年2月1日 | 大阪大学保健センター年報vol.14 p.65-74 | かわりの中で生きていくという人の存在そのもの、そして人が生きていくということそのものなのであるというメイヤロフの深い洞察が述べられている。 |
| 3. 大阪大学学生におけるアレルギー疾患の罹患状況について | 共 | 1992年2月1日 | 大阪大学保健センター年報vol.11 p.130-139 | 平成7年度に新入生を対象に実施した血圧検査、心電図検査の結果について、結果データの分布および異常所見率およびその後のフォロー等について男女別にまとめ分析を行った。血圧検査では、境界域・高血圧域の学生は4.9%であった。心電図検査においては、有所見率は17.5%で、左室肥大が疑われるものが最も多かった。これらの学生に対しては、所見に応じて医療機関の受診または経過観察とした。本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、共同研究につき本人担当部分抽出不可能だがデータの整理及び集計において中心的役割として担当した：早川りか、井上保 昭和62年から平成3年までの5年間の新入生を対象に実施した病歴調査において、花粉症、アトピー性皮膚炎等のアレルギー疾患の罹患率、発症年齢および経過について調査をした。その結果、アレルギー疾患に罹患している学生は年度の経過とともに増加しており、疾患別ではアレルギー疾患が最も多かった。また、発症年齢は10～14歳に発症したものが一番多いことが明らかとなった、本人担当部分：共同研究のため、本人担当部分は抽出不可能であるが、共同研究につき本人担当部分抽出不可能だがデータの整理、集計において中心的役割として担当した：早川りか、秋山都子、澄川一英 |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1. こどもの貧困と地域ケアを考える | 共 | 2017年7月30日 | 武庫川臨床教育学会第11回研究大会、西宮市 | 子どもの貧困問題を中心として、地域における貧困や虐待などの問題、多国籍児童、無国籍児童の問題、そして、子どもだけでなく親が抱えている問題について、地域の中でどのようなケアが求められているかを参加者とともに考え合った。 |
| 2. 子どもの貧困と支援 ～釜ヶ崎こどもの里の取り組みから～ | 共 | 2017年3月18日 | 武庫川臨床教育学会援助職・援助実践研究会、西宮市 | 大阪市西成区の釜ヶ崎で、子ども支援の活動を展開しているNPO法人「こどもの里」の活動を紹介し、そこに集う子どもたちと親の抱える問題について討論をした。庄保共子（講演）、石井邦也、早川りか（ファシリテーターをつとめた） |
| 3. 日本臨床教育学会・武庫川臨床教育学会援助職・援助実践の活動 | 共 | 2016年7月31日 | 武庫川臨床教育学会第10回研究大会、西宮市 | 2011年から6年間にわたり継続している、対人援助職・援助実践研究会の活動の経過について代表として報告するとともに、現在、地域で活動する援助職の抱える困難感について問題提起を行い、地域における援助のあり方や、援助職をどのように支えていくかについて、参加者とともに考え合った。 |
| 4. 訪問看護の現状と課題 —訪問看護師たちの語りから— | 単 | 2014年7月26日 | 平成24年度 武庫川女子大学教育研究所 臨床教育懇談会、西宮市 | 訪問看護における支援困難事例について、訪問看護師から聴き取った内容をもとに紹介し、地域における支援の難しさについて問題提起した。 |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 特別支援学校で働く看護師がいきいきと働き続けられるための支援 | 共 | 2018年4月1日～現在 | 科学研究費（基盤研究C） 研究分担者 4,030千円 （直接経費3,100千円、間接経費930千円） | 特別支援学校で働く看護師が認識している協働を推進する要因を明らかにする。これまでの研究では、看護師の協働を推進する要因として、【同職種間の良好な関係性】、【話しやすく実施しやすい関係】、【保護者の納得を重視する姿勢】、【教師の領域や役割を尊重】、【ケアの方向性の統一】、【状況に応じたケアの提案】、【その子の目標を踏まえたケア】、【その子の普段の身体状況の把握】、【経験に基づく技術と判断】、【学内の支援体制】、【自治体の支援体制】の11のカテゴリーが抽出されたが、このことを踏まえた上で、特別支援学校の看護師と他職種との協働尺度を開発する予定である。 |
| 2. 訪問看護における移動中の交通事故の現状と課題に関する研究 | 共 | 2017年4月1日～現在 | 科学研究費（基盤研究C） 研究代表者 4,550千円 （直接経費3,500千円、間接経費1,050千円） | 訪問看護における交通事故は、訪問看護におけるインシデント・アクシデント全体の20%程度を占めており、看護師のストレスのひとつとなっている。交通事故の問題は、看護師の安全確保および訪問看護事業所を運営する上で重要な課題であると考えられるため、本研究では、訪問看護特有の交通事故の現状調査を行い事故の要因および事故防止策について考察する予定である。 |
| 学会及び社会における活動等 | | | | |
| 年月日 | | | | 事項 |
| | | | | |